

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	前號雑誌を読む : 批評
Author(s)	愛知生
Citation	龍南會雑誌, 47: 62-66
Issue date	1896-06-08
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4950
Right	

批評

前號雜誌を讀む

愛知生

春去て夏來り、新緑將に滴たらんとす。閑窓戸を排して、朝風を迎ふれば、冷々として衣巾を襲ひ、朗朗たる天色濃を新緑に争ひ、庭樹鬱として、綠葉の露滴々、殆んど掬ふに堪たり。清新何物かよく之に比せん。されば此朝に生たる龍南會雜誌四十六號が、清新瀟洒なる、固より其所なり。況んや今回一新の時期に當りて、新委員の手に成れるものをや。聊先づ之を掬ふ、大に快とする所なり。開卷通讀著しき革新、顯なる進歩を見ずと雖、其錐尖終に囊中に沒せざるの意氣ありて、將來光彩陸離たらしむるものゝ如し。余自ら省みず、敢て雙手を擧て新委員諸子を迎へ、諸子の健在、益我花の光榮を揚げ、兄弟等の名に由て、龍南會雜誌史上一エボックを成す可きを期す。請ふ不明の余をして、全く不明の名を成さしむる勿れ。今や茲に謫劣不文を忘れ、妄言を敢てす、亦聊諸子を迎ふるの志を致すものなり。

開卷先づ本號の目錄を見て、高木君の前々號來續ける貞永式目を除く外、悉く是舊來の人にあらずして、皆新顔の人なるに驚き、又愈此新时期よりして、新文人新學子の馳驅場新舞臺となりたるを喜びぬ。我會の新立物諸子、奮つて檜舞臺に上り大々氣焰を吐け。然れども翻て、從來健筆を以て物し來たる、濟々たる多士、詞藻に富める文子の筆を見ざるを哀しむ、果して是何の事ぞや。最上級の人、今や業を卒ふるの秋に際し、又文を省みるに暇あらずといふに歸するか、果して然らば、是れ甚だ冷淡無情といはざるを得ず。諸子今や此地を辭して遠く遊ばんとす、又省みて暗然たるなきか、今贅言を費さじ。請ふ諸子果して情あらば、我誌上に諸子の名殘を留めよ、喜んで之を迎ふる者決して僅少にあ

らず。諸子の中文士あらざるを患へず、敢て其想を吐け、一部二部の士凡て起て示教を垂れ、燦然たる文詞を殘せ、諸子が習得する所、豈一の論文を出すに價せずんばあらざるなり。余輩后進は刮目して、意氣天を衝く雨後の新筈を俟たんものなり。

論說欄内甚寂びし。只高木君と上野君あるのみ、是れ己むを得ざるに出しものなる可きも、希くば又此の如き寂寞を呈する勿れ。高木君の『貞永式目を論ず』は、例に依て考證該博、着實の記述、史筆の最喜ぶ所なり。今回之を評するを得ず。

上野君の『國家醫學を論ず』一言にて評すれば、其筆に一種の活力を有し、氣慨の存するありと。此の如き筆は、大に此欄内に跋扈せんことを望む、敢て跋扈といふ、又故なきにあらず、絶て此の如き筆を見ざるにあらずや。先づ生存競争より説きて、簡單に國民衛生と法醫學の必要を論じ、一呵して國家醫學の省みられざるを慨し、『社會に必要な道德は社會より排斥せられ、精細動もすれば齟齬の名の下に斥けられ、勉強には碌々といひ、放蕩は奇逸と呼ばる』ることを知るとより及ぼして、『國家醫學も其濁流を汲まざるを得ざるか。余輩斯學と共に死生を俱にせんとする者、豈一言以て本學の爲に辯なくて可ならんや』と、此慨此志、君の名を成さずして己まんや。次に醫學に衛生上、法律上、治療上の三大應用あり。世人は只治療上の醫學を知りて國家醫學を知らず、まして之を行ふに當りて、彼一步を假す可き貧民よりも、却て中等社會の家に於て怠ることを嘆じ、諸君にして首肯せずんば、國家醫學の運命知る可き耳といひ、之よりその各學の解釋をなし、例を擧げて示し、結論に及んで純粹なる日本法醫學起すべし。不幸にも我日本には純粹の日本法醫學なし、宜く我帝國に適應する確然たる、日本法醫學なかる可からず。』との斷言を以て、本領を實現し、龍頭は龍尾を得て完く、一篇の言志録をなしぬ。君が吐寬の氣、吞牛の膽、盛なりと謂ふ可し。

雜錄欄内趣味あるもの多し、先は花實充實せりと言て可なり。中にも蝶二君の『うかれある記』、伊喜見君の『堀巢鶴』めでたし。いで先喜好むうかれある記を評せん。

蝶二君の『うかれある記』、輕妙の筆、楚々人を動すといふ可し、其文擬古を力めたるかの趣なきにあ
らねど、到底俳文たるを脱せざる可し。その地のめで度は、見るが如くに狀景を寫し、俳句のいみじき
は、優美飄逸を盡し、共に只々輕妙といふの外なぞ。されど『天に在ては連理の枝にたくへられたる比
翼の蝶の、翻々として菜の花に狂ふけしき、いと長閑に人を逐ふて戯るゝ風情、さてもしほらしや』又
『紅裙の一隊、二五には一人の不足なれど、正に姦といふ字の二乗なれば、稻村雀の囀よりもかしまし』
の如き輕妙の文句は、實に輕妙至極なれども、前者は餘りに色めき、后者は餘りに穿ちに過ぎたり、あ
ちずもがなと思はる。されど是只、白玉の微瑕といふ可きのみ。先づ『花の文空見直して封じ』、雨やふ
りなん、花や散らなんとの心配ひも空しく、天氣晴朗、老翁が日和の豫言を詫ちて出立しなど、拙き筆
にては何の趣味もなきものなるを、こゝはいと面白く讀みぬ。途すがら彼此にさまよひ、浮れ歩きし
様一々見るが如し。或は『花の庭掃く寺男』を笑ひ、或は蛇かと擬ふ枯木に驚き、或は舞ふ蝴蝶に戯れ、
或は春水の靜を破る蛙を眺め、或は燕雲雀にあこがれ、ゆかしき花の主の留守に休ひつ、終に目ざす
吉野の花園につきぬる、甚自然にして、行々詩の題目を捉へ來れること、只功夫々々といふべき耳。さ
れども、吉野の花園につきては、大方其處の様を寫し、外人をして想像に堪さらしむる、美景なるべし
と思ひさや、中々に言ぬが花よとて記さる、餘りにあつけなきに驚きぬ。それもうかれあるきが主
なればといは、吾何をかいはん。雨に出てゝ雨に終る、筆致正しく全体を約して、『長閑さは花見る
人の心かな』といひぬる、人生蜉蝣の命を、天地に寄せて、何の心か花を賞し月を愛づる、といふにも
思ひよす可きや。げに人は花鳥風月に遊び、春秋の樂みあるも、何日無情の風に誘われては、天地悠々
の界に去るあり、長閑けきといはんもおかしく、あなかなしといはんも面白し、偕も人の心は様々な
りけり。次に其俳句を見るに、『雲雀の聲ひまなくして春長閑なり』は忙中の閑、天上の樂人は悠々と
して歌ふ様思ふ可く、花も人も、鐘撞たは、共に花の夕暮を思ひ、三里とは、と、春雨やは、共に實際、
蝶舞ふや、なみや、及、燈火幽なり、皆實景、即妙々々。されども、花爛熳、落椿、水際に、など何の趣

味もなし、始のは只奇を好み、又ふるき御趣向、中は俗調、終は陳腐、是亦白玉の御璫ともいふ可し。而も白玉終に白玉の光を没せざるなり。初めて君の斯る文を拜し、喜んで思ふ所を憚らず、幸に恕せよ。伊喜見君の『堀巢鶴』、是肥人の好題目、君よく之を撰べり。他州の人に異なる所のものなくんばあらざる。君の妙筆を驅りて、此偉人を活動し、又當時肥州の形勢を示さんとす、君の眼高し、因て君の名を此偉人と共に揚げよ。此題決まて數號にして終るものにあらじ、大に君が氣焰を以て想を吐く可し、今や全豹の如何を知らず、後に譲りて此に評せず。只無憚言へば今一層、よく此偉人の性行を明にし、優に濶歩せしことを示し、從て當時の形勢を次にせよ。然らずんば人をして迷しめ、或は主客轉倒の嫌なきにあらず。請ふ余が妄言を取消さしむるに至れ。

まつゆ子の『金槐集を讀む』、文に未たしき所あり、評する所なま、われ之を評せず。『二八冬季動物採集日記』は、每號連載、研究の跡を出し、其精密確實なるは其道の人を喜ばしむ可し、熱心の効果は歴歴として、兩君の掌中にあり、又力めたる哉。

文苑最盛なり、和文の方にはやさしき國ふりの文より、花咲ひ鳥歌ふ様、風薫り月清む風情などを、咏じたる歌など、よく至り盡し、春光駘蕩として獨我園を照すが如し。されども漢文の方は、今や宛然秋野の霜枯の如く、只茫々たる武藏野を呈し、颯々たる風の吹荒むかと疑はれ、豪壯の文、瀟洒神韻の詩を見ず、舊人退き新人來て襲なく、疇昔盛なりし詩壇も、彌寂れにさひれぬ。今に於て新人起て名を成せ、隱逸の士來て之を回せ。

稼堂陳人うじの『涵養』、及び『物事の沿革を窮む可き話』、教示の言毎も乍ら敬服。今様『閑居の樂』やさしく、幽韻なる歌、誦めて愈調高きを見る。

和歌の評をせんに、はく大刀のは調高き歌なり、されどさやけきのさやにかけんとて、はく大刀を枕とし折角勇しき調なりしに、歌むしるどありて少しだるみたる氣味はあらずや。却てはく大刀の枕詞なきか、然らずば歌むををかねて、武夫の遊びになどよまば夫こそ絶吟ともなる可めれ。人ならば

の歌『梓弓はるつれなくも行かんとすなり』とは、優に古今の調に入れりといふ可きか、はるの枕に梓弓を呼ひしは、こゝ殊に妙なり。山人のは亦調高し『煙かくそふ谷の棧』、暮靄蒼然として夜は東より落んとする時、山家にたく煙、臚にあたりを罩めて。煙霞の中に入る山人の様、浮び出づるなり。歌欄には新顔の人未だ少し、猶盛んならんことを俟つ。

禾の舍あるじぬしの、『後撰百人一首評釋』、簡に評して、釋き盡さる、先生の志后生に厚し。漢詩僅に二英遺音、及び敲月樓主人の詩のみ、豈寂寞に驚かざるを得んや。

批評欄は此頃楮村學人の、『文學に於ける現時の國家主義』、端なく衝突を來してより、論戰數次、何日を果とも白き弓、はるより夏にかけて、相譲らず少しあぐんで見えけるが、寄手は遂に引て退きぬ。本號に又城の主は牙城を拔出で、一矢をぞ射かけられける。中々に御盛なること乍毎感服く。折角御自重あるべし。此戰よりして、此欄はあつたら血醒き古戰場となり、悲風枝をわたり、鳴禽夜人を愁殺し、天地暗慘たりしが、今や花咲く春に逢ひぬ。いでやと計り。曉より始むと一騎打て出、戰は今度が初なり、打取て高名せよと、聲低く呼わりぬ。曉より初めしもの、見るに足らず、續く大將は旗幟堂々打て打て打散らされよ。

雜報は中々謹嚴の筆を以て、侃々諤々の記事をなす。誌中最人の注目する所、重からずんばある可からず、冒頭修辭立誠との宣言、請ふ其志を成せ。

同朋雜誌は、新設にかゝるもの新案妙なり、宜く永續すべし。決して苟す可らず、輕々に筆を下す可らず、本號の批評は皆公平適切信實なり。願はくば尙進んで時に他有益雜誌の紹介批評をなさんと。書て茲に至り、徒に冗蔓に流れ、貴重紙面を汚しぬる。省みて慊然たらずんばあらず、伏して謝す、妄評多罪。